

平安朝の「風流」の一先駆者としてみた源融

ベルナルル・フランク*

源融は、平安初期における、誠に出色の人物であり、不思議に魅力のある人物です。

融は嵯峨天皇の皇子として、父の帝が在位していた、八二年〔弘仁十三年〕に生まれました。翌年の弘仁十四年、天皇が退位した後でも、朝廷で大切にされ、皇子にふさわしい、最高の教育を受けました。併し、数年も経たないうちに、いわゆる「皇別」の氏に降ろされて、「源朝臣」の姓しよを授けられ、初代源氏の十二人目になりました。

融の母は、大原家と言う、それ程身分の高くない家柄の出身でした。そのことは、言うまでもなく、彼がこのように「臣籍」に降ろされたことと関係があります。併し、時代背景を考察すれば、藤原家が当時全力を挙げて他の総ての家を皇族から遠ざけようとしていたことも考えなければなりません。

融は恐らく、若い頃から既に才人の姿を見せていたと思われます。比較的順調に出世し、諸国の守に任せられ、八五〇年〔嘉祥三年〕に参議になり、八六四年〔貞観六年〕に中納言に任命されました。それと同時に——彼に取っては、非常に意味があったことだと思ひますが——陸奥出羽の按察使を兼ねることになりました。

八七〇年〔貞観十二年〕に、大納言に昇りました。二年後の八七二年〔貞観十四年〕に、律令制度における最高の常職である左大臣に至りました。

「好事魔多し」と言ひましょうか、彼がこのように左大臣に任命されると同時に、藤原基経が右大臣になります。融より十四年若いこの基経は、前世代の権力者であつた太政大臣良房の息子でした。父の例にならつて、基経も当時絶え間なく権力を追い求めていました。

威敵から見ても、地位から見ても、前途を遮りそうに見えた融が、気にかかる存在だつたことは、当然なことです。八七六年〔貞観十八年〕に、わずか九歳の陽成天皇が即位しますと、年輩者として摂政に撰ばれるべきであつた融を口実を設けて排除し、目下であつた基経を任命する詔勅が下りました。四年後、基経は、到頭、太政大臣に達します。

基経の甥に当たり、基経の計画に役立った若い帝は、残念ながら奇妙な振舞いを見せ、色々の乱行を続けます。皇太子時代、彼の守りの役（いわゆる東宮の傅）をしていた融は、公の行事に出席することを止めて、その後はずっと自分の家に閉じ籠ることにしました。八八四年〔元慶八年〕に、基経は到頭この天皇を廢するに至ります。

新帝を撰ぶのに困つていた公卿達の前で、皇族の出身と言う誇りを持った融が、大胆にも自分自身を推薦した話は有名です。

そのようなことを言ひ出した融に、昔からの敵であつた基経は、即座に「皇胤なれど、しまたま姓給て只人にて仕へて、位に即きたる例やある」と反論して提案を徹底的に退けたそうです。

この話は「大鏡」の「基経伝」(第二巻、列伝)と「古事談」(國史大系・第一巻)と言う説話集とに書いてあります。

終に撰ばれた帝は、年をとり、穏やかな人格の持ち主であった光孝天皇でした。

三年後亡くなったこの天皇にも、その後継ぎになった宇多天皇にも、融は怨みを持たず忠節を尽して死に至るまで仕えました。併し、光孝天皇の即位の際に、関白の役目を与えられ、一層強力になった基経に抵抗することも最後まで止めなかったのも確かです。関白の役割りに疑問を投げかけた「阿衡事件」あこうに、融が積極的に加わったことは、その抵抗の著しい例です。

政治家として見た融について、大変参考になる論文を書いた山中裕氏は、「風流人」の名を得たこの融は、慥かに嵯峨源氏の中で抜んでいて政治家だったことを明白にしました。

終に藤原家の勢力拡大を止めえなかった融は、当時の多くの貴族と異なり、政治の道が支えていたから世をはかなんで「風流」の生活に没頭したのだとは絶対に言えません。寧ろ彼が「若い頃より持っていた風流心が、晩年にはより強く表面に表われただけであろう」と山中氏は強調しております。

この政治家融に見られる大胆かつ雄大な性格は、私が、今日、焦点を合せたいと思っている、彼の「風流」と案外関係があるように思えます。その上に又、それ故、融があらゆる点で大規模な目論見を抱いた人間だったことも分つていただきたいと存じます。

さて、「風流」と言う言葉について、今少し話しましょう。「風流」とは、漢語の熟語で、「風と流れ」或は「風の流れ」と分解されます。ここでは主に、この言葉を深く研究した、小川環樹、星川清孝の両先生の解釈に基づいて、簡単な説明を述べて見ます。

「風」も「流れ」も、本来自然現象を表わす語ですが、人間に関する表現にも早くから用いられました。「論語」の中に「君子之徳風」と言う言葉が出て来ます。譬喩としてこのように使われている「風」は、小川氏によれば、次のように解釈されなければなりません。「君主…の態度が、その周囲及び人民に次第に拡って行って、気がつかない間に道徳的な影響を及ぼす。…儒家に特有の政治思想であった。」「しかし君主或いは政治家のような政治的關係からはなれた個人についても『風』という字が用いられた。」「孟子」の中にそのような例が見えます。同じ「孟子」に、「風流」の逆の順序である「流風」(流れる風)と言う言葉が出て来ます。星川氏はそれを「先王の徳化の流伝」として解釈します。伝わって行く「風」の中に、一種の倫理的な「美」があることに注意して欲しい、と星川氏は強調しております。

「風」はその原義から転じて、道徳的な品格、人品、そうして、一般に、人柄から受ける感じ、更に具体的にその人の容貌、姿、態度などを示すようになりました。

「風流」と言う熟語そのものは、漢以前の文献には見えない様です。「漢書」「後漢書」に出て来る極少ない例を見れば、その頃は、「風」一字だけの表現と略々同じ意味を持っています。「風流」という語は魏晉時代に広く流行し始め、その意味が益々複雑になり、南朝・唐時代を通じて、社会の変化に伴い、本来の意味から非常に遠ざかったニュアンスを含むようになりました。

この語の意味の変遷を精密に研究した星川氏に従えば、漢末から晋まで続いている不安定な社会の雰囲気から現われて来る「風流」の中では「節操」——取りも直さず「主義を守ること」——と言うニュアンスが大切です。これに相当する「みさを」と言う日本語が「風流」の読み方として早くから伝わりました。「日本霊異記」(上巻ノ十三)に出ている、「風流——「読みは、美佐平」——ある女」(原文「有風流女…」)は、「心の高潔な女」のことです。

乱れて来た社会に対して、このような「節操」の理念を守ろうとした人達は「名士」(偉大な人物、即ち忠義者)として

知られています。その「名士の風流」は、まだ儒教の思想に基いていたと言われます。

ところが、晋時代には、道家——主に、老荘的思想が発達します。この思想の影響を受けた「遁世者」は儒教の原理によって作られた社会を軽蔑し、儒教が「俗」と思ったものを「雅」と評価し、儒教が「雅」としたものを「俗」と評価します。彼らに取っては、「雅」の極致である「風流」は、社会から離れ、すべての因襲から抜けて、精神活動の自由を得たものの態度です。そこに真の人格、真の美が求められることとなります。

同時に、老荘的思想から見て、「絶体者」である「自然」に帰ろうとする傾向が強まり、自然そのものが持っている本質も「風流」であるとされました。一種の「感動的な個性美」を持つ自然物も、やはり人間と同様に、それぞれ自己の「風流」を持っているとされています。晋より少し後のテキストの中に、ある柳の「風流」が称えられています。

晋時代に繁栄した貴族階級では、諸芸術、特に音学、詩歌、書道、絵画、さらにまた「生活芸術」が各分野にわたって、空前の発展を見ました。これと関連して、それぞれの芸の美の本質を表わす時にも、「風流」と言う表現を使うことになりました。(例えば、「琴の風流」)。そうした「美的な風流」を求めていた芸術家の中で、極端に自分の「道」に熱中して驚くべき個性を持っていた人々の性格を言い表わす時には、偶に「狂癡」(しれもの)の様な言葉を使っておりました。晋以後の「風流人」の態度の中には、兎も角、少しエキセントリックな要素が見られる、と中国美術について数冊の本を書いたフランスのニコラー・ヴァンディエ (Nicolas-Vandier) 夫人は言っております。

晋代の貴族社会が養った「美」は南朝、唐代に渡って、益々華やかになる傾向を見せました。優婉な、幾らか官能的な魅力を含む雰囲気、それらの時代の「風流」の特徴です。もし一歩進むと、「風流」は、「好色」「色好み」と略々同じニュアンスを帯びることになります。併し、時には「風流人」は、只、「流行人」の意味に過ぎないこともあります。

唐代の詩歌に現われる「風流」の意味を研究した小西甚一先生は、結論として次のことを述べております。(その)

「風流」とは、音楽をめ、詩文をたしなみ、酒興を愛し、女性との交遊をたのしむ、という生活から昇華された理想典型だったと考えられよう。

小西先生がまた言います「このような意味の風流は、かならずしも日本では風流と言いあらわされないけれども、実質的には中古の貴族の生活理念と一致している。『源氏物語』に描かれた光源氏の生活は、まさに風流であろう。」

「万葉集」の中に出て来る「風流」に今日の注釈者は必ず「みやび」と言う日本語読みを当てます。「みやび」は「みや—宮廷」からなつて、「ひな(鄙)—田舎、俗」からなつた「ひなび」の対照語です。

もとは、「宮廷風」の意味だったのですが、「上品」洗練された風雅「風味」優雅などのニュアンスが加わつて来ました。そう言う訳けで、この「みやび」と言う言葉はかなり多くの漢語の表現の読みとして用いられました。

「万葉集」に出て来る「風流」の例は、実は大変少なく、二、三ヶ所(巻第二、第一二六、一二七。巻第四、第七二一)に過ぎない様です。この問題について、今日詳しい話が出来ませんが、大体、それらとそれらに近い言葉の内容を見れば、「みやびを」みやびやかな男)即ち「風流人」は「いきで上品な」人で、或る意味において「紳士[true gentleman]」、「vrai galant homme」を示し、或る場合には寧ろ「暇がある若い大宮人で男女交遊に通じているもの」を指しています。どちらにしても、それぞれの内要に特に深い意味が含まれているとは思えません。

併し「伊勢物語」や「源氏物語」に至りますと、そこに出て来る人物の「みやび」——取りも直さず「風流」——は、恐らく中国でも考えられなかつた程、洗練されたものになつたでしょう。私は、その「風流」とは何か、と問われればそれを「全身全霊で追い求めた、一種の絶対的なエレガンス」として定義するだろうと思ひます。

「やんごとなき際にはあらぬ」母の腹から生まれて、若い時分源の姓を受け、当然、光源氏のモデルの一人に擬せられた融は、このような目で見た「風流」の系譜の中で、どのような地位を占めていたのでしょうか。

和歌の世界においては、融は、普通「河原の左大臣」として知られています。「百人一首」に見られるそれは、正に彼のことを示します。「河原」とは、この場合に、「賀茂川の河原」の略称です。

融が——それは恐らく彼が左大臣に任命された貞観十四年（八七二年）ごろだった、と推察されていますが——六条より北、賀茂川の岸に、広さ四町程の「河原院」と言う邸宅を造りました。平安京にあったプライベートな構内として、このような面積は最大であったと思われるのです。

この広大な正方形の構内に、融はそれまで日本になかったような珍しい庭を築きました。特に有名になったのは、陸奥の塩竈しおがまの浦を像って掘られた池のことです。（注一）

塩竈は松島の海岸の南に接して、当時は松島よりも名高いところでした。伊勢物語の八十一段には「わがみかど六十余国の中に、塩竈といふ所に似たるところなかりけり」と書いてあります。

海を象って池を造ろうとした意図は、決して融に始まったことではありません。上代に既に似たような例が見られます。新羅しらぎの都だった慶洲で、六七八年に設計された「臨海殿」（現在慶洲で復原中）、天武天皇の皇子草壁皇子くさかべのみこが、それより二〇年ぐら以後、「荒磯」に準えて造った「島の宮」の池、左大臣橘諸兄が、八世紀の中頃、平城京で、松の木に囲まれた砂浜の風に拵えたそれも、皆それぞれ、この先例として見るべきものです。

併し、融の河原院は、その昔の庭と大分違ったものです。面積が遙かに大きかったからばかりではなく、又面白さという見地から見ても、やはり当時の人々を大いに感激させるような、様々な要素に富んでいたのです。

その頃の人達を何よりも先ずびっくりさせたのは、融が、塩竈の風景を像った河原院の浜辺で、同じ塩竈沿岸の住民の日々の仕事そのものを再現した、と言うことです。

その仕事とは、塩を造る業でした。方法は次の様なものだったようです。塩水を幾度も振り掛けた藻を干し、次に焼

いて、後で、残っていたその灰殻を、又塩水に溶かしました。塩分の多くなつた、その塩水を大きな釜で長い間煮詰めた結果、かなり純良な塩が出来ました。この方法を「藻塩焼」と言っております。「塩竈」の名も、そこから出て来たのは、言うまでもありません。釜から立ち上つて、塩竈の空で棚引いていた煙は、有名になり、和歌にも早くから読まれるものになりました。

煙は、その当時においては、様々な連想をよびおこすものでした。一方では、下で燻っている火が表に現われる印であつて、胸に抱いた、相手に伝わらない思いの表徴とされてきました。もう一方では、火葬の煙を思い起させ、世の無常の姿を表わすものでした。その上に又、全然違った調子で、仁徳天皇の彼の有名な故事に従い、煙は、民の竈が賑やかで国が豊かであることも示唆しておりました。

塩を焼いていた「河原の院」の空で、塩竈の煙が立ち上つていたさまは、名所への深い憧れを抱いていた平安京の人達にとっては、非常に面白い、風雅なものでした。融が死ぬと、その煙もすぐに消えてしまいました。暫く経つて、煙が絶えた「河原の院」を訪れた紀貫之は、淋しくなつて来たこのさまを、古今集にある名歌で歌(注)いました。

塩をこのように焼くために、塩水が必要だつたことは、言うまでもありません。華やかな左大臣はその塩水を大量に汲むために、今の大阪のあたりにあつた難波の浦まで多くの召使を送つていたと言われます。水を運び行列していた人の姿も、都で大変な評判だつたそうです。こうして塩水を入れた池に、魚と「海の虫」も住ませました。

日本には景色の面白い名所が沢山あるのに、融の心はなぜこの塩竈の風景を撰んだのでしょうか。「伊勢物語」に言われている通りに、塩竈の風景が特に勝れていたのが、勿論その理由の一つでしたが、私はやはりそれ許りではなかつたと思います。融が一時「陸奥出羽の按察使」をしていたため、陸奥との縁が深かつたのです。「伊勢物語」の初段の話及び「古今集」や「百人一首」に載っている、彼の傑作の歌は、陸奥の「しのぶもぢずり」と言う名産の織物をテーマに

した歌です。陸奥の名を高めた河原の院の造作も、疑いもなく、一種のお国自慢、或は言い換えると、一種の紋章でした。

非常に遠かったため、それまでよく知られていなかった、あの塩竈が、より面白く、エキゾチックな見晴しを見せる場面でした。「風流」について言えば、そんな場面を都へ持って来たことは慥かに最高の風流でした。融はこうして「風流をつくした」(続古事談、巻第四)「風流の体を窮めた」(本朝文集〔逸文〕で、「伊呂波字類抄」三に引用)、とよく称えられました。

所が、そう言うことをしようとした融には、もう一つの動機があったのではないかと考えられます。

世界の地勢を代表するような、個性に恵まれた風景を、小型化した形で自分の庭に再現する慣わしは、明らかに中国に起原を持つものです。「フランス極東学院」の紀要に掲載された著名な論文の中で、ロルフ・スタイン氏 (Rolph Stein) は、このような慣わしは、単なる自然愛、或いは芸術的な楽しみに基づくのみならず、その上に又、中国の或る古い思想に深く根差していたものだった、と結論づけました。この思想に従えば、東西南北それぞれに見られる絶景並びにその名石や珍しい植物と動物を自分の周囲に集めた人は、自分の身に世界中のエネルギ―を引き寄せ吸収し、精力を増し寿命も延ばすに至るとのことです。

このような考えは、明白に「不老不死」の探求と関係があり、「道教」の理念の一つの表われである「神仙思想」を思い浮かせるものです。

そうした考えは、日本で名所に擬えて庭を造った人々に、どれほど影響を与えたのでしょうか。特に、賀茂川の辺で塩竈海岸の地勢及びその住民の活躍までを再現した融は、今述べたところの「神仙思想」の感化を受けたと思われるでしょうか。

中国に広く普及した「道教」は、日本では、仏教、特に密教、修験道など、その上に又陰陽道と混り合い、様々な信仰や行事を通して宗教生活に色々な面で融け込んだのですが、独立した体系としては存在しえなかったことは、よく知られています。併し、漢籍に詳しい文人達の間には、道家の教理にも通曉し、道教の理念——殊に「不老長生」——に憧れを持つ人々がかなり大勢いたようです。勿論、或る人が「不死の靈藥」を捜したから、その人が必ずしも、「道教」の典型的な存在である「神仙」達の仲間に加わろうとした、とは言えません。道教の教えにかかわらずして、そう言う「靈藥」を求めた人達は、奈良や平安時代に慥かにいた、とその問題を細く研究した下出積与氏が言っております。併し、融の場合には、そういうように単純であったとは思われません。何故かと言えば、幾つかの証拠となる例が文献に出て来るからです。

先ず第一に注意すべき点は、融が、河原院を造る以前に、父の帝が退位の後お住いとされた「嵯峨の院」の近くに、「栖霞觀」と言う山莊を持っていたことです。その場所は、凡そ現在の有名な嵯峨の清涼寺——或は、釈迦堂——の境内に当り、今でも、融の墓と思われる石塔がそこに保存されております。平安時代に早くもその名は「栖霞觀」から「栖霞寺」に換えられました。

「觀」と言う文字は、後世の中国では「道教の寺院」を意味するようになりましたが、以前でも、道教的な意義を持ち、天になるべく近い所まで聳えて造られた「たかどの」を示した言葉です。「栖霞」は、「かすみの中にすむ、或は、かすみの中のすみか」を意味しております。併し、この場合には、「かすみ」は普通の「かすみ」ではなく、天の高い所で、太陽の近くに棚引く、赤く染った薄雲の一種を表現しています。浄化されて、鳥のように軽くなり、炎の如く輝く身を備えている「神仙」達が、そのあたりを自由自在にいつも飛んでいるとされています。「栖霞觀」は、やはり、そう言う様な神仙達と交渉を持つために工夫された場所だった、と思われれます。その庭の中に、或る朝雲に乗じて神仙を求めて

去って行った淮南王を暗示させる所もあった（本朝文粹卷十、源順著の詩序。）と書いてあります。

融が「神仙の道」を実際に学んだと言うことを推測させる根拠が他に見られます。

その一つは、十二世紀の初頭に成立した大江匡房の「本朝神仙伝」（日本古典全書、第二〇日本思想大系 第十三）の中にある話です。

この話によれば、融の側近く仕えていた一人の「待」^{まごい}が、既に年老いた左大臣の背中を見て、その姿が恰も「神仙」のようであったことを言い出しました。そうしてこの侍は、実は、自分自身も「神仙の道」を学ぶもので、近いうちに「道」が「成る」から、一緒にこの世を去って行こう、と融に勧めました。暫くしてから、或る晩に、庭の木の間に、景^{かげ}のようなものが現われて、（日本古典全書の川口久雄氏校註には、「かげらふ」とあります）、融を誘う声も聞えて来ました。ところが融が失言したために、その景は到頭そのまま消えてしまいました。

融をいかにも皮肉っているようなこの話は、単なる説話でしかありませんが、当時の人達が、融が「神仙の道」に凝っていたと見做していたことを教えていると言えましょう。

そのことをより明確に示す資料があります。この資料は左大臣が亡くなった寛平八年（八九五年）の後、彼の一周忌の機会に作られた「願文」^{がんもん}の中の一節です。「願文」の作者は菅原道真でして、テキストは道真の作品集の一つである「菅家文章」（巻第十三、第六六六）に記載されています。

問題の節は、融の死亡について「すきはらまるとせむ薬動薨逝」と述べています。このような形式的な文章の中では、余り私的な細かいことを書かない筈ですから、この節の意味は特別でしょう。融が只、体のために悪い薬を飲んだというのではなくて、寧ろ丹^{たん}、或は何かの他の仙薬を飲んで中毒して亡くなった、と解釈できると私は思います。中国で、そのような仙薬を飲んで死んだ人々がかなり大勢いたらしいのです。八五九年に亡くなった唐の宣宗皇帝がそれらの一人だったとされて

います。

「願文」は、そう言う死亡の仕方を、いかにも、遺憾な、悔むべきこととして述べている気がします。

融が死後に成仏することが出来なかつたので、その霊が河原の院に止まって、人が怖がった、と言う話(注3)が有名です。

その原因は、融が、在世中、河原の院に愛着があり過ぎたためだ、と書いてありますが、私は、やはり、そればかりではなく、彼が、当時一般的だった仏教修業から離れて、変った行ないをしたから、そう言う風に思われたのだと思います。

現在の「棲霞寺」——即ち「清涼寺」の中の「阿弥陀堂」——には、融が晩年に掛けた願によって彫られた「阿弥陀三尊」が、今でも保存されています。これを考えると、彼が決して、仏道に背を向けた、とは言われまいと思われのですが、一向一心で仏教修業を行なった同時代の或る人々と彼のことを比較すると、仏法の観点から見ると、彼が異端の疑をかけられたらうと、どうしても思うようになります。

謡曲の中に、世阿弥作と思われる「融とわ」と言う有名な能があります。融は、そこに、前ジテとして「都のうちに移された塩竈」である河原の院の今の淋しさを歌う潮汲みの老人の姿を借りて出て来ます。更に、後ジテとして、左大臣の昔の豪華な姿に戻って舞います。ワキは、そう言う夢幻能或は幽霊能に屢々見える「旅僧たびそう」の一人です。

能の影響を深く受けたフランスの詩人、ポール・クローデルの専門家であり、能そのものにも詳しい渡辺守章氏は、一度私に次のようなことを言いました。「この世を余りにも唄んで成仏出来なかつた亡き人が、謡曲の最後では、大体のところには、その様な「ワキ」の「旅僧」の祈によって、よく、悟の道に入ろうとしている、或は、御法みのりの船に乗り死生の海を渡って、その海の向うにある「彼岸」に至り着いた、それで、成仏した、と言われておりますが、「融」の曲には、融が、それとは異なって、終に、その夜、塩竈の浦を遠くまで照らしている明月の光で舞い、到頭、「竹取物語」の「か

ぐや姫」のように、月の都に入っていくことになっています。この解決法は、世阿弥には珍らしく仏教的ではありません。」

このことを考れば、世阿弥の時代に伝わっていた融のイメージは、慥かに「長生」を求めた人物であったに違いありません。「本朝神仙伝」が語った融の失敗の話に背いて、彼が見事に本来の夢を果した場面を見せることになりました。

ここでは「道教」と言っても、融のような、中国人でもない人物の「道教」は、「信者」としての道教よりも、寧ろ、風雅な体験をしようとした人間——取りも直さず、風流人——の「道教」として見たいものです。この見地から見ても、河原の院も風流的な体験の道場であったことが言えるでしょう。

河原の院は、平安時代を通じて、海を主だった景色にした築庭様式にずっとその影響を与えた様です。

十世紀の中ごろに、醍醐天皇の皇子にあたる源高明が、「西宮さいくう」と言う有名な邸宅で、融に真似て、塩水の池を造りましたが、一層モダンな手段を用いて、只の水に塩を入れることによって目的を遂げたそうです。

それから数十年下って、大中臣補親おおなかとみのおかと言う歌人が、天の橋立の海岸を模して、風流心を著しく表わしました。

十二世紀に、平家の人々は、一段進んで、海そのものの景色を借景しようとして、今の神戸付近に当る福原の別荘地でも、最高の見晴らしを見せる敵島でも、瀬戸内海の真向うに自分の住いを定めました。

庭園の歴史の専門家によれば、こう言う考え方の起原は、融が本来、河原の院でしたことにあると言われます。

栖霞観せいかくわんと河原の院の他に、融は平安京の南にあたる宇治に、もう一つの山荘を持っておりました。その山荘は「宇治の別業べつぎょう」と言って、後に、平等院が建られた丁度その場所にありました。

「水の流れ」を主要な要素として用いた庭の発展を研究した江上綏氏が、この「別業」について注意を引く、次のようなことを言いました。「そのような庭が、上代に既に発達していたのですが、平安時代に入ってからその全盛期が見ら

れます。」江上氏は、宇治川そのものの流れを見渡した融の「別業」を、その全盛期の一番早い好例として挙げております。

ですから、海岸を見晴らしにした庭のスタイルでも、水の流れを使った庭のジャンルでも、想像力と才能に富んだ融が、それぞれの発達に著しい刺激を与えたことは全く疑いありません。

その刺激の重要さを正しく評価しようと思えば、平安時代における庭園の役割を考えなければなりません。平安人に取っては、庭はたしかに、美しい山水を愛でて遊び、自然の移り変りを眺めながら、たまに、「不老不死」の世界を思い浮べるところでした。しかしそれだけではなく、又その上に諸の芸術——特に和歌と漢詩——を修する場所としても見られておりました。

融が河原の院を造った時は、丁度、歌合が流行しはじめた頃です。「河原院の歌合」と言う「歌合」は、ずっと後のものになります。融の在世中にも、既に歌を作る宴会がそこで催されたようです。

在原業平とその兄行平ゆきひらを初めとして、当時の著名な歌人が「河原の院」に親しく通かよっていたことは、「伊勢物語」を通して知ることが出来ます。

この物語の「初段」に、融の有名な「みちのくの　しのぶもちずり（注）」が、一種の古典的な本歌として載せられていることも、陸奥まで来たのだらうかと思ひ迷わせた「河原院」が作品の一つの絶頂点である「八十一段」の舞台になって来ることも、非常に意味があることだらうと、「伊勢物語」を深く研究した渡辺実先生が強調しております。

渡辺先生によれば、「伊勢物語」の母胎と推察される「原伊勢物語」は、業平を中心とした風流歌人の仲間がそれぞれ持ちよった材料を用いて、一共同体として纏めたようなものであって、その仲間のパトロンとも言うべき位置に、融がいたのではないかと考えられます。

融自身の歌としては、残念ながら、四首しか伝わっていません。^(注5)和歌が益々専門歌人のもものになって行った平安時代初期には、社会的に偉い立場にいた人達の歌が、大体において少なくなりますから、融も特別ではないのです。

併し、残っているあの四首は、その出発点の強さ、その展開に溢れて湧き出る想像力、その非常に巧で微かに消えて行く終局から見ても、和歌史上、誠に調子のユニークなものである、としみじみ感じます。

藤原家の勢力に圧迫された融の姿は、後世には大部分消されて行ったのですが、蒐集されたすべての資料をもってその姿を照らして見ると、融は様々な観点から考えて、疑いもなく、ずば抜けた人物に見えます。

庭園と和歌が文化の中心であった平安時代においてだけではなく、この文化と密接な繋がりを持ち続けた日本の芸術的感覚の形成においてさえも、融が与えた影響はまだ十分評価されていないと思われれます。

歐洲人である私の目で見れば、融をイタリアのルネッサンスにおける学芸の偉大な擁護者に例えても、決して可笑しくないと存じます。

歌の達人、「庭のしれもの」で、神仙に夢中になった彼の融は、正しく、平安初期における完璧な「風流人」そのものだったのではないのでしょうか。(終)

注1・主な出典は頼昭の「古今集註」(類従本)第十六と「今昔物語集」巻第二七の第二の項ですが他にもあります。

注2・巻十六、第八五二「君まさで煙絶えにし塩籠のうら淋しくも見えわたるかな。」

注3・主な出典は、「本朝文粹」巻第十四、紀在昌著の諷誦文。「今昔物語集」巻第二七の第二。「江談抄」(類従本)第三。「続古事談」(類従本)第四ですが他にもあります。

注4・みちのくのしのぶもちずりたれ故にみだれそめにし、我れならなくに。

注5・「古今集」第七二四、第八七三。「後撰集」第五六、第一〇八二。

参考文献については、以前 *Annuaire de l'Ecole pratique des Hautes Etudes 4 e section*, p. 7, 1976—1977, 1977—1978に発表致しました。それを御覽いただきたく存じます。

この主題について興味ある方々のために、日本語で書かれた研究の主なものを次に記します。

◎源融の政治的生涯について

○山中裕「平安人物志」東京、東京大学出版会、昭和四九年。

◎「風流」一般について

○小川環樹「風流の語義の変化」再版、「中国語学研究」の中、東京、創文社、昭和五二年。

○星川清孝「晋代における『風流』の理念の成立過程について」『正統、茨城大学文理学部紀要』、一九五一年三月、一九五二年二月。

○小西甚一「道、中世の理念」東京、講談社現代新書、昭和五〇年。

◎庭園一般について

○森繹「平安時代庭園の研究」京都、桑名文星堂、昭和二〇年。

○吉永義信「庭園」〔図説日本文化史大系、5、平安時代(下)の中〕、東京、小学館、昭和三二年。

○EGAMI Yasushi (江上毅), *The River Style Garden and the Problem of Nosuji in Early Medieval Japan*, Tokyo, France-Asie/Asia, Nouvelle Série XIX, n° 180 (1963, 6/9月号)。

◎神仙について

○下出積与「神仙思想」東京、吉川弘文館、昭和四三年。

○同、「道教、その行道と思想」東京、評論社、昭和四六年。

◎源融の文化人としての生活について、特に「河原院」について

○川勝政太郎「河原院と源融」史跡と美術、二十五号、昭和二六年九月。

○高橋和夫、「源氏物語『六条院』の源泉について」『国語と国文学』、昭和三三年。

○犬養廉「河原院の歌人達——安法法師を軸として」『国語と国文学』、昭和四二年十月号。

◎「栖霞観」について

○塚本善隆、「嵯峨清涼寺史」、平安篇、(仏教史研究、五、の中)、昭和三二年。

◎「伊勢物語」と融について、

○渡辺実、「伊勢物語」、新潮日本古典集成、東京、昭和五十一年。

◎能「融」について、

○渡辺守章、「融」、廢墟の夢、夢の廢墟」、国文学・解釈と教材の研究、昭和五十五年一月号。

付記

稿後、次の二つの論考を知る機会を得させていただきました。

○吉川需まろ、「幻の河原院」、月刊文化財3、昭和五五年。

○表章ちやうちや、「作品研究〈融〉」、「観世」、四七巻八号、昭和五五年六月。

* BERNARD FRANK

[現職] コレージュ・ド・フランス教授